

冬の寒さの中にも、水仙やロウバイ、早春の花々が咲き始めました。ピンク色の寒紅梅が、たわわに実った南天の赤い実と並んで、もうすぐ春がやってくることを告げています。再来週には、早くも今年の受難節が始まります。

論争の火曜日

イースターまでの一週間を受難週と言いますが、それぞれに名前がついています。前週の日曜日は「パームサンデー」、月曜日は「宮きよめの月曜日」、先週の聖書箇所です。そして「論争の火曜日」「ベタニアの水曜日」「洗足の木曜日」と続きます。今朝の、祭司達との権威問答は、この「論争の火曜日」にあたるエピソードです。

いくつかの注解書は、この記事を取り扱っていませんでした。確かに、この箇所はいわゆる「禅問答」のようで、何がその核心か、掴みにくいとも感じます。

そこで注目する対象を、祭司長や律法学者たち、長老たちに向けてみましょう。イキイキと民衆を教え、福音を宣べ伝えておられるイエス様を、どうして彼らは、憎らしく思ったのでしょうか。それは、彼らの内面の弱さが、浮き彫りにされたからです。

権威として、最も力が弱いのは、実は社会的な肩書きです。表向きは、皆うやうやしく接していても、人間は肩書だけでは本心から従うことはありません。共に人生を歩む経験をし、真実を教えてくれると納得した時に、人間は、心からその人を尊敬し、信頼して、従います。そこに資格の有無は関係ありません。

イエス様は「ラビ」の称号も、資格も持っていませんでした。このことは、外的な権威は、内的な権威に実に弱いものであるかを示します。祭司長たちが躍起になってお前にその自由を与えた覚えはない、とイエス様を告発した態度は、彼らのもろさを逆に証明しているのです。

内側からわいてくる力

イエス様に「あなた方自身は、わたしの権威がどこから出ていると思っているのか」と逆に問われて、祭司長たちは戸惑い、「どこからか、わかりません」と答えました。卑怯な答えですが、イエス様は追求されませんでした。ここで、彼らをやっつけていれば、あるいは十字架を回避することもできたかもしれません。しかし、そうはされませんでした。イエス様にとって、内側からわいてくる力は、十字架の死すら、乗り越えさせる神の愛の力だったからです。使徒言行録4章には、ペトロやヨハネ、使徒達に、同じように祭司長たちが「何の権威でこんなことをしているのか」と尋問される場面があります。その時彼らは、聖霊に満たされて「あなた方が十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです」と答えたのです。自分が生きている意味を明確に知って、「わたしは知っています！」と輝いて語る、幸いな人の姿が、ここに示されています。